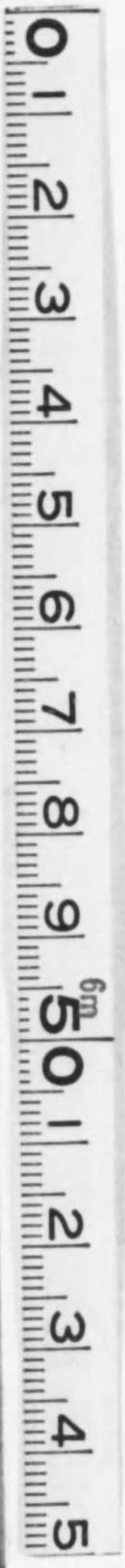


醫經研究 第二輯

納本

特 259

626



始



醫經研究第二輯 内容

素問入式運氣論奥

十干之圖	三一
論十干第二	三一
十二支圖	三九
論十二支第三	四十
納音之圖	五一
論納音第四	五二

稿259
126



十干は五行の陰陽を分けて出来たものである。例へば甲は木の陽、乙は木の陰とする。同じ木行でも甲は陽だから木の元（兄）と呼び、乙は陰だから木の弟（弟）と呼ぶのである。餘の四行もこれに準ずる。十干をえと云ふのは兄弟の意から起つたものである。十干と十二支を対照すると、十干は幹で十二支は枝である。乃ち干は幹から転じ、支は枝から転じたのである。草木が幹が立つて枝葉が分れる。恰もそれの如く十干が立つて、干から分れる歳月・日時・五運の道に致すのであ

る。この干支の名義は、古典を調べて見ても何人が命けたものか不明である。

四の第一圖は、十干とその秩序に時計の針の廻る方向に列記し、第二圖は五行を同じい方向に列記し、その間に十干を、それに該当する第二圖の五行の上の左右に当り、下から向つて右の干の隣の干で、左の方が陰の干である。例へば水行の石土が土で、左上が癸である。

論 十干 第二

凡そ十干。地氣始於子支者。乃聖人定陰陽之輕之用也。著者以彰其義。立號以表其事。由是子支。然後成其紀。遠可步於歲。而統六十許。近可推於日。而明十二時。歲運之盈虛。氣令之早。將令驗古。感得而之。昔時是也。故去補而人未定之。明其月而察病向往之。死生。所謂驗之焉。可謂又矣哉。東方甲乙。南方丙丁。西方庚辛。中央戊己。五行之位也。蓋甲乙其位木。行春之令。曰乃陽內而陰過包之。草木始甲而出也。乙者陽過中。然未得正力。位乙屈也。又云乙軋也。萬物皆得甲乙。自軋而出之。丙丁其位火。行夏之令。丙乃陽上而陰下。陰內而陽外。丁陽其強。適逢與陰相丁。又云丙炳也。萬物皆炳然若見而活也。戊己其位土。行周四季。戊陽土也。萬物生而出之。萬物伐而入之。己陰土也。無所為而得己者也。又云戊茂也。己起也。

土行四季之末。萬物會秀者。物屈而起也。庚辛其位金。行秋之令。庚乃陰平陽。更而繞者也。辛乃陽在下。陰在上。陰平陽極於此。庚更故也。而辛新也。庚辛皆金。金味辛。物成而後有味。又云萬物蕭然。更茂更新成。壬癸其位水。行冬之令。壬乃陽既定胎陰主之。乃陽生之位。壬而為胎與子同意。癸者揆也。天令至此。萬物閉藏。懷胎於其下。揆然萌芽。天之道也。以為日名焉。故經曰。天有十日。日六竟而周甲者此也。乃天地之數。故甲丙戊庚壬為陽。乙丁己辛癸為陰。五行各一陰一陽故有十月也。

天ノ氣ハ甲ノ干ニ始マリ、地ノ氣ハ子ノ支ニ始マルコトハ、乃チ聖人、陰陽更輕ノ用ヲ究ケルナリ。名ヲ著ケテ以テ其徳ヲ彰シ、號ヲ立テ、以テ其事ヲ表ス。是ニ由テ子甲相合シテ然レテ後ニ其紀ヲ成ス。遠クハ歲ヲ步シテ六十年ヲ號スヘク、近クハ日ヲ推シテ十二時ヲ明クヘシ。歲運ノ盈虛、氣令ノ早晏、萬物ノ生化、今ヲ將テ古ヲ驗ムルニ、感得テ之ヲ知ル。特是ノミニ非ス。其細ヲ攷ヘテ人ノ未明ノ禍福ヲ知り、其用ヲ明ニシテ病ノ向往ノ死生ヲ察スルトキハ、精微ノ義大ナルカナト謂ヒツベシ。是ヲ以テ東方ハ甲乙、南方ハ丙丁、西方ハ庚辛、北方ハ壬癸、中央ハ戊己、五行ノ位ナリ。

蓋シ甲乙ハ其位ハ木、春ノ令ヲ行フ。甲ハ乃チ陽内ニシテ陰尚之ヲ包ム。草木始メテ甲クシテ

出ルナリ。乙ハ陽中ヲ過ク。然レドモ未ダ正方ヲ得ズ、尚乙屈スルナリ。又云ク、乙ハ軋ナリ。萬物皆辛甲ヲ解キ、自ラ抽軋シテ之ニ出ヅ。

丙丁ハ其位ハ火、夏ノ令ヲ行フ。丙ハ乃チ陽上ニシテ陰下、陰内ニシテ陽外ナリ。丁ハ陽、其レ強クシテ適ニ能ク陰氣ト相丁ル。又云ク、丙ハ炳ナリ。萬物皆炳然著見シテ強シ。

戊己ハ其位ハ土、四季ニ行周ス。戊ハ陽土ナリ、萬物生シテ之ヨリ出テ、萬物伐レテ之ニ入ル。己ハ陰土ナリ。鳥ル所無クシテ己イコトヲ得ル者ナリ。又云ク、戊ハ茂ナリ、己ハ起ナリ、土ハ

四季ノ末ニ行ヒテ萬物ノ含ホスル者、抑屈シテ起ルナリ。庚辛ハ其位ハ金、秋ノ令ヲ行フ。庚ハ乃チ陰干ノ陽、更メテ続ク者ナリ。辛ハ乃チ陽下ニ在リ

陰上ニ在リ。陰干ノ陽此ニ極ル。庚ハ故ラ更ムルナリ。而シテ辛ハ新ナリ。庚辛ハ皆金ナリ。味ハ辛シ。物成リテ後ニ味有リ。又曰ク、萬物蕭然トシテ茂ラ更メテ更新ニ成ル。

壬癸ハ其位ハ水、冬ノ令ヲ行フ。壬ハ乃チ陽既ニ胎ラ受ケテ、陰之ヲ任ム。乃チ陽生ズルノ位ニシテ胎ヲ爲ス。子ト同意ナリ。癸ハ揆ナリ。天令此ニ至リテ、萬物閉藏シテ、其下ニ懷妊シテ揆然トシテ萌芽ス。

天ノ道ナリ。以テ日ノ名ト爲ス。故ニ終ニ曰ク、天ニ十日有リ、日ニ大タビ竟マテ甲ヲ周ルト

ハ此ナリ。乃チ天地ノ數ナリ。故ニ甲・丙・戊・庚・壬ヲ陽ト爲シ、乙・丁・己・辛・癸ヲ陰ト爲ス。五行各一陰一陽、故ニ十日有ルナリ。

十干を論ず 五行が分れ十干が立つ。故に本書では第一に五行を論じ、第二に十干を論ずるものである。毎歳の五運は年々十干に従って運る所の五行である。然らば五行十干は天地運氣の心髄であるから、詳細に究めるに値かねばならぬ。

十干の小序 △ 天ノ氣ハ甲ノ干ニ始マリ、地ノ氣ハ子ノ支ニ始マレコトハ、乃チ聖人、陰陽家經ノ用ヲ究ムルナリ。

「天ノ氣ハ甲ノ干ニ始マリ、地ノ氣ハ子ノ支ニ始マレ」とは「大徹旨大論」にある語である。天干地支と云ひ、天の氣は十干、地の氣は十二支に因るとされり。天の氣は甲の干に始まると云ふのは、天は無形の氣の道である、十干は五行の陰陽二氣を分けて成るものである。陰陽は無形の氣であるから、十干は天の氣に属する。甲は十干の首であるから、天の氣の始まる所とするのである。地の支は子の支に始まると云ふのは、十二支は四方・四隅の五行より分れ成るものであるから、十二支は地の氣に属する、子は十二支の首であるから、地の氣の始まる所である。

十干・十二支と天地の關係を教理上の云ふと、陽の数は一・九・三・七・五である。一と九と、三と七と、五と五と合すれば何れも十である。故に十干は陽教から成るに因て天氣に属する。陰の数は四・八・十・二・六である。四と八と、十と二と、六と六と合すれば何れも十二である。故に十二支は陰教より成るから地氣に属する。

陰陽重輕に就て説明するに、輕く清める陽氣は天と爲り、重く濁れる陰氣は地となる。即ち陰は重く、陽は輕い。陰陽重輕の用とは、天地陰陽の功用の義である。本文の意は、十干は天氣に属し、十二支は地氣に属し、甲は天氣の始まる所、子は地氣の始まる所とするは、上古の聖人の十干十二支の號を分ち立て、天地陰陽重輕の功用を推し究め、一般の者に知らせんが爲である。

△名ヲ着レテ以テ其德ヲ彰シ、號ヲ立テ、以テ其事ヲ表ス。

十干の名を著けて、十干の各々が持つ德性を彰かにし、十二支の號を立て、十干の各々が主る所の事理を表す。

△是・由テ子申相合シテ、然レ後・其記ヲ成ス。

十干は天に属し、十二支は地に属し、天地がその氣を合するにより干支と亦その氣を合し、十干は甲より相合せ始めて干支が行り、然して後に六十の紀教を成すのである。甲子より合せ行つて復て甲子に還るまで六十の教を終るので、この六十を干支配合の一紀とする。

△遠クハ歳ヲ歩レテ六十年ヲ統ブベシ、近クハ日ヲ推レテ十二時ヲ明ムベシ。

この十干十二支の配合する處の道を以て、遠く(廣く推し及ぼすの意)求めるときは毎歳の氣運を一步一步推し究め行きて、六十年間の陰陽五行の龍へく、りを知ることか出来る。これを近く(細かに推し求むるの意)求めるときは毎日の氣を推し尋ねて、晝夜十二時の陰陽五行の重輕の用を明かにすることか出来る。

年月日時の十干のことは豫備篇を参照せられたい。日夜十二時は干支に合してある。その十二時の十干を知る法は、その日の干を推して、子の刻からその干を立てるのである。甲と巳の日は、夜半子の時を甲と立てる。さうすると日中午の時は庚となる。その他も總て斯の如く子の時の十干を立て、行けばよろしい。子の時の十干を知るには左の如くすればよろしい。



△ 歲運ノ盈虚、氣令ノ早晏、萬物ノ生化、今ヲ將テ古ヲ驗ムルニ、咸得テ之ヲ知ル、特見ノミニ非ズ。

大過と不及
氣令ノ早晏

盈は大過、虚は不及である。十干を以て考へるときは、毎歲の五運の、大過と不及を知るものである。甲丙庚戌壬は大過で、乙丁己辛亥は不及の運である。氣令は三陰三陽の六氣の、寒暑燥湿風火の化令である。これを行ふに於て早晏の相異があることも亦毎歲の属する所の十干に従つて知るものである。甲丙庚戌壬の年は氣令を行ふことが早く、乙丁己辛亥の年は遅いのが常である。萬物の生榮死枯も亦干支の合する所の氣運を以て候ひ知らるのである。十干十二支の合配する道を以て考へる時は歲運の大過不及、大氣化令の早晏、萬物の生死も、今日を以て萬古を驗するに、悉く心に得て之を知るのである。然して十干の効用は、以上述べたことだけで済むといふことも、其の大を起して是也。

△ 其細ヲ攻ヘテ人ノ未萌ノ禍福ヲ知り、其用ヲ明シテ病ノ向往ノ死生ヲ察スルトキハ、精微ノ義大ナルカナト謂ヒマベレ。

十干の微細なる理を攻へて人事の禍福を未をせざる所に知ることができ、例へば内事には柔日(乙丁辛巳癸の日)を用ひ、外事には剛日(甲丙庚戌壬の日)を用ひる。婚礼の如きは内事で、官職等は外事に属する。内事に柔日、外事に剛日を用ひるのを福とし、これに反するを禍とする。又甲の日は養生の事を行ひ、收殺の事を行つてはならぬ。庚辛の日は前夜を防いで生氣を護る等のことがあり、此等に從ふものは福、逆ふ者は禍である。これは十干のみならず、十二支に於ても定めがある。就ては干支の功用を明かにして、病の向往の死生(豫後の良否)を察することとができる。それは唯氣法時論の四難等に出てゐる。例へば二十四難に「手の太陰の氣起する者は甲に篤く、乙に死す」とあるが如きである。十干を以て、以上の如き数々の理を知るときは、實に十干には至精微妙の義理の含まれてゐることが至つて大きいと云はねばならぬ。以上は十干の論の小序である。

△ 是ヲ以テ東方ハ甲乙、南方ハ丙丁、西方ハ庚辛、北方ハ壬癸、中央ハ戊己、五行

甲乙 東木 春
 丙丁 南火 夏
 庚辛 西金 秋
 壬癸 北水 冬

ノ位ナリ。

これは十干をその五行の属する方位に配置したものである。

△ 蓋し甲乙ハ、其位ハ木、春ノ令ヲ行フ。甲ハ乃チ陽内ニシテ、陰尚之ヲ包ム。草木始メテ甲クニテ出ルナリ。

甲乙は位が東方で木行の氣であるから、春暖生発の氣令を行ふものである。甲は陽であるけれども、今は陰が有つて陽を包んで居り、陽が生ずるとは雖も、陰がなほこれを抑え屈めて伸ばせないのである。方位を以て云へば、東とは雖も甲は東北の間で、東方に近く位して生発の陽位にありと雖も、北方の陰位を未だ離れずして陰氣がなほ之を包むの位である。故に甲の古文字はもと甲であつた。これは包む所の陰の象、丁は内に生達せんと欲する所の陽の象である。これは草木を以て甲の氣象を示したものである。乃ち甲は、草木の始めて生ずる時、玄皮を冠つて萌発する。その冠る所の玄皮が丁であり、丁は草木が甲くして芽を出でんとしてある氣象である。

△ 乙ハ陽中ヲ過ク。然レトモ未ダ正方ヲ得ズ、曲ニ屈スルナリ。

乙は甲の陽が漸く進んで、包まれる所の陰の中を出たと雖も、陰が未だ退き盡まずして、陰の氣に包まれ抑えられ、陽氣が悉く伸びること能はざるの氣である。

故に陽中を過ぐと云ふ。これは包まれる所の陰の中を過半出て未だ陽氣である。それで陽氣の正しい方を得て居ないのである。それで陽氣が悉く伸びることを得ず乙屈して居る。乙屈とは乙の字の形状の如く屈曲して居るのである。古の乙の字はもとてであつた。これは甲の冠る所の丁を離れて丁の陽象のみとなつたが、尚ほ陰のために屈められこの如き形象を以て居るのである。草木の始めて生ずるとき、玄皮を冠つて出るのは甲であり、その冠れる玄皮を始めて解落いた処は乙の氣象である。

△ 又云ク、乙ハ軋ナリ。萬物皆子甲ヲ解キ、自ラ抽軋シテ之ニ出ツ。

又乙は軋である。軋は車輪のまじる音、又固いものを強く相摩して発する音である。子甲とは草木が萌芽の始に冠る所の玄皮を云ふ。即ち堅い玄皮を解いて抽出せんとして軋音を發して出るので軋と云ふ。

△ 丙丁ハ其位ハ火、夏ノ令ヲ行フ。丙ハ乃チ陽上ニシテ陰下、陰内ニシテ陽外ナリ。

丙は火である。火焰が上に輝くのは陽が上に有るの象、燈火の根が濁つて黒いのは陰が下に在るの象である。火氣が外に発して萬方を照すのは陽が外にあるの象、火焰の中が濁つて物を隔る（不透明）は陰が内に在るの象である。丙の字はまゝと丙で、一と門に入るの象である。一は陽氣の上に發するの象、几は門で陰氣が入るの象である。陽上と云ふ陽外と云ふは丙字の一、陰下と云ふ陰内と云ふは丙字の内を釋するものである。

△丁ハ陽、其レ強クシテ適ク能ク陰氣ト相丁ル

丁は陽氣の盛に進んで強いものである（玉篇に、丁は強なり）から、たま／＼陰の氣と相丁つて陰陽の衝突を来す、丁の字はまゝと介で、説文に几の方に象とある。丙丁は夏の時である、夏は炎暑が降り熱するの時に、及びて井の底の涼しいのは、丙の陽上陰下の氣の象による。又夏時萬物よく繁茂生長するのは、丁の陽氣が強くと陰氣と相丁り、陰陽の交渉が盛に行はれる爲である。

△又云ク、丙ハ炳ナリ、萬物皆炳然著見シテ強レ。

丙は炳である。炳は明かな意である。丙丁は夏火の令で、この時に萬物が陽火の

戊己

象を得て炳然と明かに著見れて、物の象が實體が強く見らるつてである。炳然は丙を叙し、強は丁を得たものである。

△戊己ハ、其位ハ土、四季ニ行周ル。戊ハ陽土ナリ、萬物生レテ之ヨリ出テ、萬物伏レテ之ニ入レ。

四季とは春夏秋冬の四時の末の月、四土即ち四つの土用を云ふ。蓋し季は末である。戊己は俱に土行であるが、その中で戊は陽土である。萬物は生じて土から出て、伏れて土に入る。万物が生じて出るのは辰戌月の土用である。伏れて入るのは戌九月の土用である。戊は陽土であるから、萬物が之に生ずる理が明かである。然るに戌九月の土用は陽土である。伏れて入るのに陽とは不合理なやうであるが、蓋し終は始の根であり、死するは生の本である。故に九月の土用に万物が伏れて入るのは、生氣が根に帰つて復た生すべきの本であるから、敢て不合理とは云はれぬ。

△己ハ陰土ナリ、爲ル所無クシテ己ムコトヲ得ル者ナリ。

陽土の功は働いて用があり、陰土の氣は働かずして用が無いのである。即ち爲る所が無くて己むことを得るものである。これは未六月の土用と丑十二月の土用で

ある。己むことを得るとは、その位が極まり止つて進まぬの事云ふ。六月は万物が
長い極つて進まず、十二月は万物が枯れ極つてその位が止つて居るのである。

△又云ク、庚ハ茂ナリ、己ハ起ナリ。

庚は陽土であらうから、万物が茂つて成長する。故に庚は茂なりと云ふ。己は陰土
にして、万物がその位に抑えられ己むと雖も、己む者は復起るべきの兆であるか
ら、己は起なりと云ふ。

△土ハ四季ノ末、行ヒテ、万物ノ含秀スル者、抑屈シテ起ルナリ。

土(土用)は四季の末に十八日づゝ行はれて、草木其他万物が土中に含まれて秀
でんとする者は、四季の月(生・大・九・十二月)の中の陰土(六月と十二月)の
為に抑え屈められ、それが反動として起り出るのである。故に万物の生化は土用に
最も多く行はれる。

△庚辛ハ其位ハ金、秋ノ令ヲ行フ。庚ハ乃チ陰干ノ陽、更ニテ絶々者ナリ。辛ハ乃
チ陽下ニ在リテ陰上ニ在リ。陰干ノ陽比ニ極マル。

陽干は甲乙(木)・丙丁(火)、陰干は戊己(土)・庚辛(金)・壬癸(水)である。

庚辛

土用

庚辛

その金行たる陰干の中の陽は庚にして、陰は辛である。庚は庚である。庚は陰干の
陽であるから、この時に陽を陰に更めて、陰を以て陽の次に続かせるのである。
辛は陽氣が衰へて下り沈み、陰氣が盛に上り見れ、庚の陰干の陽が、この辛の位
で全く陰位に致し極めるものである。

△庚ハ故キヲ更ムルナリ。而レテ辛ハ新ナリ。

これは前文をさらに文字上から説明したもので、庚の時には陽氣の古きを陰に改
め、辛の時に至つて、全く陰氣に新しく変更し極めるのである。

△庚辛ハ皆金ナリ。金ノ味ハ辛レ。物成リテ後ニ味アリ。

辛は金の殺傷の氣の味である。凡そ万物の味は、陰氣の收斂を得て成就して後に
成る者である。殊に金氣は收斂し束ねて万物を成就させる氣である。成就して後は
味が成るに由て、金の干の味(辛)に属する所に因んで辛の字を用ひるのである。

△又云ク、万物蕭然トシテ、茂ヲ改メテ、実新ニ成ル。

庚年の陰氣を以て万物が嚴肅になること、茂を改めては庚の釋、実新に成るとは
辛の釋である。乃ち草木の茂るのを更めて收め締め(庚)、草木の果実が新に成就

するのである(辛)。

△壬癸ハ、其位ハ水、冬ノ令ヲ行フ。壬ハ乃チ陽既ニ胎ヲ受ケテ、陰之ヲ任ム。乃チ陽生ズルノ位、壬ンテ胎ヲ爲ス、子ト同意ナリ。

壬は北方の水干で、水は陰である。これ陰極つて一陽の生ずる位である。その陰を以て母とする。壬むと云ふのがそれである。乃ち陰たる母が一陽たる子を妊んでゐる。それは坎(水)の卦三の上下の陰又は壬で、中の陽又は胎める一陽である。壬めは胎となる。これは十二支の中なる北方の子と同じ意である。子は子の義である。

△癸ハ揆ナリ。天令此ニ至リテ、万物閉藏シテ其下ニ裏妊シテ、揆然トシテ萌芽ス。壬癸は候に北方の陰水である故に、天の氣令を行ふに癸の時に至つて万物は皆、癸の陰に閉藏される。その閉藏の陰の下に陽氣を懐胎し、時節を揆つて、その懐妊する所の陽氣を發生萌芽せしめんと待つべきである。壬は十一月冬至の一陽未復の分、癸は十二月盛陰の分で、未春の發生升動を揆り待つ時の時である。以上で甲から癸まで十干の一々に就ての説明は終つた。

總括

△天ノ道ナリ。以テ日ノ名ト爲ス。

以上に述べた處の十干は、五行を各々陰陽の二氣に分つ者であるから、無形の氣道に属し、天の道である。日も亦天の陽道であるから、十干を毎日の名として十日たつのである。

△故ニ經ニ曰ク、天ニ十日有り、日六タヒ竟リテ甲ヲ周ルトハ此レナリ。乃チ天地ノ數ナリ。

經は六藏藏象論である。十日は十干の一周の日だから、天に十日有りと云ふ。日六たび竟るとは、十日が六度竟れば六十日である。乃ち十日・六竟・六十日は天地の氣數である。

△故ニ甲・丙・戊・庚・壬ハ陽ト爲レ、乙・丁・己・辛・癸ヲ陰ト爲ス。五行各々一陰一陽、故ニ十日有ルナリ。

これは既に説明してあるから、こゝでの再説は蛇足であらう。

木陽||甲 火陽||丙 土陽||戊 金陽||庚 水陽||壬
木陰||乙 火陰||丁 土陰||己 金陰||辛 水陰||癸

二十支圖



支は枝である。これは五行から分れた枝であつて、これによつて天地陰陽五行の氣を教へるのである。凡そ五行の形を地に當て、方隅に配置する。方は東西南北の四方、隅は東南・西南・西北・東北の四隅である。四方で云へば、北方の水の陰陽を分けて亥(陰)子(陽)とする。東方の木の陰陽を分けて寅(陽)卯(陰)とする。南方の火の陰陽を分けて巳(陰)午(陽)とする。西方の金の陰陽を分けて申(陽)酉(陰)とする。土は中宮(中央)に在つて四隅に行く。それは丑(東

北)辰(東南)未(西南)戌(西北)で、その中陰土ニつ(丑未)陽土ニつ(辰戌)である。圓の第一圓の真中の土は中宮、第二圓の木は東、火は南、金は西、水は北である。第一圓の周辺に十二支が順次に時計の針の廻る方向に排列してある。そして水の頭に亥・子とあるのは水行が陰陽に分れたのである。餘はこれに準ずる。四方の中間の四隅も圓によつて理解される。そして十二支陰陽の區別は、子を陽とし丑を陰とし、斯の如く陰陽を交互に當て、見ればよくわかる。

論 十二支 第二

清陽爲元。五行彰而十干立。濁陰爲地。八方定而十二支分。運移氣遷歲歲而盈虛應紀。上升下降物物而变化可期。所以干支配合共臻妙用矣。○子者北方至陰。寒水之位。而一陽肇生之始。故陰極則陽生。壬而爲胎。子之爲子。此十一月之辰也。○丑丑尚執而紐之。又丑陰也。助也。謂十二月終時之陰。以結起氣名焉。○寅正月也。陽已在上。陰已在下。人始見之時。故律管飛灰以候之。可以逆事之始也。又寅陽也。津也。謂物之津塗也。○卯日升之時也。又卯茂也。言二月陽氣盛而華茂。○辰者陽已過半。三月之時。物盡震而長。又謂辰言震也。○巳者四月正陽而無陰也。自子至巳陽之位。陽於定當又巳起也。物畢盡而起。○午者陽尚未屈。陰始生而爲主。又云午長也。大也。物至五月皆滿長大矣。○

未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰
未六月、木已重而成矣。又云未味也。物成而有味。與辛同意。申者七月之辰。申陽所為而已。陰

所以ナリ。
リテ歳々而モ盈虚紀ニ應レ、上升下降シテ物々而モ变化期スベシ。支干配合シテ共ニ妙用ニ臻ル
所以ナリ。

子ハ北方至陰寒水ノ位ニ在リ、一陽始ヲ生ズルノ始ナリ。故ニ陰極マルトキハ陽生シ、壬ンテ
胎ヲ爲シ、子之ヲ子ト爲ス。此レ十一月ノ辰ナリ。

丑ニ至リテ陰尚執シテ之ヲ紐グ。又丑ハ陰ナリ、助ナリ。謂ユル十二月ハ終始ノ際、結紐スル
ヲ以テ名ト爲ス。

寅ハ正月ナリ。陽巳ニ上ニ在リ、陰巳ニ下ニ在リ、人始テ之ヲ見ルノ時ナリ。故ニ律管及テ飛
ハレテ以テ之ヲ候フ。以テ事ノ始ラ述グベシ。又寅ハ演ナリ、津ナリ。謂ユル物ノ津塗ナリ。

卯ハ日升ルノ時ナリ。又卯ハ茂ナリ。言フ心ハ二月陽氣盛ニレテ盛茂ス。

辰ハ陽巳ニ半ヲ過グ。三月ノ時、物盡ク震フテ長ズ。又謂ユル辰カ言ハ震ナリ。

巳ハ四月、正陽ニシテ陰無シ。子ヨリ巳ニ至リテ、陽ノ位見ニ於テ當ル。又巳ハ起ナリ、物畢
ク盡シテ起ル。

午ハ陽氣ヲ屈セズ、陰始テ生ジテ主タリ。又云ク、午ハ長ナリ、大ナリ。物五月ニ至リテ皆滿
テテ長大ナリ。
未ハ六月、木已ニ重リテ成ル。又云ク、未ハ味ナリ。物成リテ味有り。辛ト同意ナリ。
申ハ七月ノ辰、陽ノ爲ス所ヲ申フテ巳ム。

酉ハ日入ノ時、乃チ陰ノ正中八月ナリ。又云ク、酉ハ緇ナリ、乃物猶縮シテ收斂ス。
九月ハ戌、陽未ダ既キズ。然レドモ事ヲ用ヒズ、戌土ノ中ニ潛藏ス。戌ニ位シテ天門ト爲ル故ナリ。又云ク、戌ハ減ナリ、萬物皆衰滅ス。

十月ハ亥、純陰ナリ。又亥ハ効ナリ。言フ心ハ陰氣萬物ヲ効殺ス。

地ノ道ナリ。故ニ之ヲ以テ月ニ名ク。甲ノ干ハ乃チ天ノ五行アリ。一陰一陽之ヲ言フ。子ノ支ハ地ノ方隅ヲ以テ之ヲ言フ。故ニ子・寅・午・申ヲ陽ト爲シ、卯・巳・酉・亥ヲ陰ト爲ス。土ハ四維ニ居レテ王スルコト四季ノ末ニ在リテ、土ニ四有リ。辰・戌ヲ陽ト爲シ、丑・未ヲ陰ト爲ス。故ニ其教同ジカラス。合レテ之ヲ言ヘバ、十ヲ十二ニ配レ共ニ六十日ト成ル。六六ヲ復ネテ歳ヲ爲ス。云ニ終ニ曰ク、天六六ノ節ヲ以テ、以テ一歳ヲ成ストハ此ノ謂レナリ。十二支モ亦十二律ト曰ヒ、亦十二辰ト曰フ。其辰ニ属スル者有リ。乃チ中ニ位シテ臨ム所、二十八宿ノ星ト禽トヲ主ル。故ニ其生(星)ト宿ノ禽トノ同ク属スル所ト爲スベキガ故ナリ。而レテ星ト禽、又正副有リ。尾・火・虎・箕・水・豹ノ如キハ皆寅ニ在リ、尤・金・龍・角・木・蛟ハ皆辰ニ在リ。虎・雉ヲ正ト爲ス。餘ハ皆此例ナリ。火虎・金龍ハ又七曜ヲ以テ之ヲ配フ。今ノ所謂密日ハ乃チ七曜ノ名號、太陽ノ直日ヲ以テス。則チ日ノ密、是レ日ノ宿ニ隨ヒテ言フナリ。素問ニ明ニスル

所無レト雖モ亦陰陽ノ奧義ナリ。故ニ文ニ隨ヒテ畧ク以テ之ヲ考カルノミ

十二支を論ず 十二支は平旦(夜明け)を寅とし、その順序によつて各十二時(現制の二時間まゝ一時とす)に配置し、又正月を寅とし、その順序によつて十二月に配置する。これは三陰三陽に合するものである。故に十二支陰陽の深理を推すときは、時と月との氣化を知る事が明かになり、司天・在泉の應酬を辨ずることと亦詳かになる。十干と十二支の配合によつて天氣の道、五運六氣の法を成すものであるが故に、運氣を学ぶ者は、十干十二支の道理を詳かにすることと綱要とせばならぬ。是を以て本書では先づ五行(第一)十干(第二)十二支(第三)の論から説くのである。

小序



陰陽ハ天ト爲リ、五行彰レテ十干立ツ。濁陰ハ地ト成リ、八方定マリテ十二支分

清陽ハ天ト爲リ、濁陰ハ地ト爲るとは、陰陽徳象大論の語である。陽氣を軽くして澄む者は上つて天となり、これから五行(木火土金水の五氣)が彰れ、その五行が各々陰陽に分れて十干が立つ。陰氣の重くして濁れるものは下つて地となり、こ

れより八方が定まつて、四方の陰陽が分れて八つ、四隅の陰陽が四つ、總て十二支に分れる。

△運移り氣遷りテ、歳々ニシテ盈虚紀ニ應ズ。

十干に従つて五運が移りめぐり、十二支に従つて司天・在泉の六氣が遷り行くことか毎歳にして、盈（大過）虚（不及）が十干・十二支なる綱紀（まきり）に應じて居る。

△上升下降シテ、物々而モ変化期スベレ。

在泉の氣は上升し、司天の氣は下降して、万物の變化を致す。故に干支を以て測るときは、万物の變化の道も亦期（たま）るべきものである。

△支干配合シテ共ニ妙用ニ臻ル。

以上は十二支十干が配合して致す所であつて、共に斯の如き神妙なる作用のあるに課る所以のものである。以上はこの論の小序である。

△子ハ北方至陰寒水ノ位ニシテ、一陽肇（ひら）テ生ズルノ始ナリ。

至陰とは至極の陰と云ふ意である。子は北方に配し、こゝは陰の極まる所、そして寒水（寒は水行）の位である。そして陰が極まれば陽が生ずるとは、陰陽学の原

子十一
五陰一陽

則である。故に子は陰が極に達して一陽が肇を生ずるのである。

△故ニ陰極マルトキハ陽生ジ、壬（にん）テ胎ヲ爲シ、子（ね）テ子トス。

こゝとは前篇で述べた壬癸の壬である（十干の圖と十二支の圖を對照して見れば、子の前の位は壬に當る）。壬の至陰が壬んで一陽の胎を成し、その子が即ち子である（前篇壬の條参照）。

△此レ十一月ノ辰ナリ。

こゝで云ふ辰は辰（たう）ではなく、十二支の異名である（以下これに準ず）。子は十一月冬至に一陽を生ずる氣象を得た辰支である。故に子を以て十一月の名とする。古の子の字は早或は早（さう）と書き、これは胎兒が母腹に孕まれてゐるの象である。

△五ニ至リテ陰尚執シテ之ヲ紐（な）ア

子の時に始めて一陽が生じ、丑に至つて二陽が生ずると雖も、四陰の氣が在る盛で、陰を以て陽を執り止めて紐（な）ふ時である。丑は紐である。紐は四陰を以て二陽を紐（な）ひ止めて發出させない意である。古の丑の字はア（あ）で、これは手に物を執るの象である。乃ち陰を以て陽を執り束ねるの意である。

丑十二
四陰二陽

△ 又丑ハ陰ナリ、助ナリ。

丑は三陽が生ずる時とは昆も四陰が本居これに執するから、陰にして陽では無い。陰が陽を翫ふとは、陽の起ち上らうとするのを陰が抑えて居るのであつて、害するのでは無く、陽の生長を助けるのである。それで助なりと云ふ。

△ 丑は十二月の名である。十二月は舊年の終、未歳の始、従つて万物收藏の終、発

生の始にして終始の際である。終始の際を結紐の意を以てこの月の名としたのである。

△ 寅ハ正月ナリ。

夏の時代に寅を以て正月として居た。その後時代の變遷と共に種々と変更されたが、漢の武帝の時に夏の法に従ふこととなり、それが今に用ひられて居るのである。

△ 陽巳ニ上ニ在リ、陰巳ニ下ニ在リ、人始メテ之ヲ見ルノ時ナリ。

丑の時ニ三陽が生じ、寅の時に三陽が生ずる。そして陽氣は上に浮み上らうとし、陰氣は下に沈んで之に累る時である。丑の時には二陽が生ずると雖も、四陰に紐はれ

て居たが、今度は三陽となつて浮き上らうとする。故に天地の氣候に微しく陽氣が現れ、従つて吾人が始めて三陽の生ずることを見らうの時である。

△ 故ニ律管灰ヲ飛バシテ以テ之ヲ候フ。以テ事ノ始ヲ述ブベシ。

律管は十二律の管である。十二律とは支那で定められた音楽上の十二の調子である。銅を以て律管を作り、静かな土中にその管の半ばを埋めて、中に軽い灰を納れ、上に薄絹を敷いてこれを候ふに、正月に至るときは、律管の中からその灰が自ら飛出るとして、正月となつたことが知られると云ふことが、後漢書の律曆志にある。そのわけは、正月は陽氣が浮上つたことを人が見る時であると云ふ程に、律管の灰も孟春の月に至つて自ら飛出で、三陽が生ずる時が来たことを候ひ知らすのである。そして寅正月は三陽發生の始であるから、人事一切のことを始めに行ふて、天地の氣を助くべきである。

△ 又寅ハ演ナリ、津ナリ、謂ユル物ノ津塗ナリ。

演は水が長く流るゝの貌。津は氣液である。塗は途。又道路の義である。この時に万物發生の氣液を受け、長く引延ぶ道路となるを以て、演なり津なりと云ふ。或

卯二月
二陰四陽

人は、この時に陽風が氷を解き、水が長く流れて、物々及氣液を生ずるの路であると云ふ。古の寅の字は兪であつた。寅の時に陽氣が浮上らうとするけれども、陰が尚強いために目的を達することが出来ない。それは人は陰氣の強く闕れるの象、更には陽氣が下から鋭く上り出んと欲するの象である。寅は三陰三陽で陰と陽とが伯仲の間にあるが、やがては陰が退いて陽が立ち上るのである。

△卯八日升ルノ時ナリ。

此れ大徹旨大論に所謂顯明の位である。晝夜を以て言ふときは、平旦に夜陰が始めて開けて、日光が始めて出る時の氣象である。古の卯の字は卵であつた。これは陽が多く（四陽）して陰が少い（二陰）、よつて陰がその門を聞いて陽氣が発生した象である。

△又卯ハ茂ナリ。言フ心ハ、二月陽氣盛ニシテ華茂ス。

卯は二月で、この時に四陽の氣が盛にして万物の發育が多く見れ、物々及華茂するを以て、卯は茂なりと云ふ。草は人畜鳥魚の如き有情の生化の盛なるを云ひ、茂は無情の草木等の生化の盛なるを云ふ。

辰三月
一陰五陽

△辰ハ陽已ニ半ラ過グ。

卯の時に四陽が生じ、辰の時に五陽が生じ、陽氣が已に過半を生ずる。

△三月ノ時、物盡ク震アラ長ズ。

辰は震である。辰は三月の時である。この時に五陽が盛んになるから、萬物悉く生を盡して震動して生長する。

△又謂ユル辰ガ言ハ震ナリ。

前項の如く震ふによる。古の辰の字は辰であつた。三月は雷聲振動して農作物の芒生するの節である。故に辰は雷聲の動に象り、二は上の字、二つを組合せた辰は雷聲が上に動するの義、ては物が芒生するの象である。

△巳ハ四月、正陽ニシテ陰無し。

正陽は純陽である。巳四月は六陽が生じ盡して、陰は一つも無い。故に正陽と云ふ。

△子ヨリ巳ニ至リテ陽ノ位、陽是ニ於テ當ル。

子に一陽生じ、丑に二陽生じ、寅に三陽生じ、卯に四陽生じ、辰に五陽生じ、巳

巳四月
六陽

に大陽が生ずる。故に子より巳までは、次第に陽氣が生ずる位である。然れども子より辰までは皆陰氣を兼帯するから、陽が獨り主となることは出来ない。然るに巳の四月には陽が悉く生じて陰が無いから、この時は陽氣が獨りて天地造化の用を盡するのである。

△又巳、起ナリ。物畢ク盡シテ起ル。

逆陽なるが故に、万物が悉く息を盡して生長し、起るのを以て巳は起てあるといふ。古の巳の字はひびで、これは陰が藏れ陽が見れ出て、萬物が著しく現れて文章を成すの象である。

△午ハ陽未ダ屈セス、陰始メテ生ジテ主タリ。

午の時に一陰が始めて生ずる（子の時に一陽が始めて生ずるのと對照せよ）と雖も、五陽かなほ屈せずして盛んである。たゞ一陰が始めて生ずるのみである。然れどもこれから陰氣の主りとなるのである。

△又云ク、午ハ長ナリ、大ナリ。物五月ニ至リテ皆満チテ長大ナリ。

この時に盛陽。氣が微陰の氣と交り合するによつて、午の五月には万物が盈満し

て長大となる。古の午の字はもと木であつた。これは一陰の氣が生じて、陽の中へ衝刺するの象である。

△未ハ六月、木巳ニ重リテ成ル。

午に一陰が生じ、未に二陰生じて陽は四陽である。故に未の六月には陰陽が交つて、草木の枝葉が巳に重つて繁茂する。是を以て木の字をニフ重ねて未の字を作つたのである。古の未の字を米に作つたのと亦この義である。

△又云ク、未ハ味ナリ。物成リテ味有リ。辛ト同じ意ナリ。

この時に二陰四陽にして陰と陽が合通するによつて、物がよく成熟して味がある。それで未には味の義がある。而して十干の辛と同じ意だと云ふ。然れども辛は謂ふ所の味は陰を以て收束するが故であり、未に言ふ所の味は二陰と四陽が合通するが故であらう。従つて辛と未とはその意が同じでは無い。辛と相似たりと云つた方が穩当であらう。

△申ハ七月ノ辰、陽ノ爲ス所ヲ申フテ巳也。

申の時に三陰が生じて三陽が退く。故に申七月の時には陰を以て陽の爲す所を申

午
一陰五陽

未
二陰四陽

申
三陰三陽

ふて、これからは生発（爲す所）か已んで行らない。

△陰申ニ至ルトモハ上下通じテ、人始メテ白露葉落ルヲ見ル。乃チ其候ナリ。

申の時には三陰の氣が天地上下の間を通行して、人始めて白露繁く降り木の葉が落ちることを知る。

△陰事ヲ速ヤテ以テ之ヲ成スベシ。

この時に人も陰の事を進行して、天地の陰氣を助成すべきである。

△又云ク、申ハ身ナリ。言フ心ハ物ノ体皆成ル。

この時に三陰に収束せられて、万物の身体がよく成就する。故に申は身なりと云ふ。古の申の文字は申であった。これは手指で物を持つ象である。この時に陰氣が收斂を主り、陽氣をして升發させない意がある。

酉八月
四陰ニ陽

△酉ハ日入ノ時、乃チ陰正中八月ナリ。

酉の時は四陰が生じ、陽は二陽のみである。故に陰氣が閉蔽して開發せない。晝夜を以て言へば、太陽が地下に入藏れて夜陰の閉塞する時である。乃ち陰氣收斂の正中で、月で云へば八月の陰氣である。古の酉の字は酉或は死で、これは陰氣が收

藏して門を閉るの象である。又酉は西（酉）に通ずる。西は陰氣收斂の位である。

△又云ク、酉ハ縮ナリ。万物皆縮收斂ス。

此の時に陰氣が盛にして、万物が皆縮り縮つて收斂する。

戌九月
五陰ニ陽

△九月ハ戌、陽未ダ既キズ。然レトモ事ヲ用ヒズ、戌土ノ中ニ潛藏ス。

戌九月は五陰が盛になると虽も、陽が未だ既きずして一陽が存する。然れども天地の間には、五陰の氣が事を用品、一陽の氣は事を用品ず、たゞ潛り藏るのみである。九月は十干に於ては戌であり、一陽の氣が戌の土中に藏れて居る。その象として戌の中に一を加へて戌の字となつたのである。

△乃チ乾ハ戌ニ位シ、天門ト爲ル故ナリ。

乾は文王後天の卦位である。乾は戌に位し、戌を以て天門とする。蓋し戌は陽氣が土中に潛藏する所であるから乾がじに位する。且つ戌は陰氣が盛にして陽氣の缺けた處である。缺けた處に門戸を立てるから、戌は陽氣の缺けたるに因つて天門と名くる門が立つ。易学上乾は天であるから天門と云ふのである。

△又云ク、戌ハ減ナリ。万物皆衰減ス。

この時に陰殺が盛に行はれて、陽生を減じ、万物が皆夜へ減るから、戌は減なりと云ふ。

亥月十月
六陰

△十月ハ亥・純陰ナリ。

純陰とは陰氣のみで、一陽も雜らないのを云ふ。この時は六陰が悉く見れて居る。(巳の純陽と對照せよ)

△又亥ハ効ナリ。言フ心ハ陰氣万物ヲ効殺ス。

この時に六陰の氣が盛にして万物を効殺すか故に、亥は効なりと云ふ。古の亥の字は萌であつた。これは万物が地下に入藏して、草木の根葉が内に含育するの象である。

總括

△此レ地ノ道ナリ。故ニ此ヲ以テ月ニ名ク。

前編に「天ノ道ナリ。以テ日ノ名ト爲ス」とあるのに對應して居る。十干は天の道、十二支は地の道である。以上の十二支は四方四隅より分れ立つから地の道である。故に十二支を以て十二月の名とする。日は天の陽道であるから十干を以て名け、月は地の陰道であるから十二支を以て名ける。

△甲ノ干ハ乃チ天ノ五行ナリ。一陰一陽之ヲ云フ。

甲の干とは十干である。金木水火土の形は地の五行である。十干の五行は陰陽の氣から立つ者であるから天の五行と云ふべし。地は形に属し、天は氣に属す。五行を一陰一陽に分けて十干が立つ。

△子ノ支ハ地ノ方隅ヲ以テ之ヲ云フ。

子の支とは十二支である。地の四方の陰陽八と、四隅の陰陽四とを合して十二支が立つ。

△改ニ子・寅・午・申ヲ陽ト爲シ、卯・巳・酉・亥ヲ陰ト爲ス。土ハ四維ニ居レテ四季ノ末ニ在リテ、土ニ四有リ、辰・戌ヲ陽ト爲シ、丑・未ヲ陰ト爲ス。

これは既に述べた處である。四維は四隅と云ふに同じ。四季の末十八日づつ、土用と云ひ、土氣の王する時である。土に四有りとは、時候では四季の土用、方位では四隅を云ふ。

△故ニ其數同じカラス。

この「故に」は「甲ノ干ハ」以下を承けて居る。干の數は十、支の數は十二であ

つて同じで無いのを云ふ。

△合シテ之ヲ言ハバ、十ヲ十二ニ配シテ共ニ六十日ト成ル、六六ヲ復テ歳ヲ成ス、十ヲ十二支に配合して行らせば干支相合して共に六十日と成る。これは十と十二の最小公倍数は六十であるからである。そして六十甲子を六つ重ねて、三百六十にして一歳を成すものである。

△故ニ終ニ曰ク、天六六、節ヲ以テ一歳ヲ成ストハ此謂ヒナリ。

終は大前藏家論である。六六の節は、甲子六十日を一節とし、これを六つ重ねて三百六十日となるのを云ふ。

△十二支モ亦十二律ト曰ヒ、亦十二辰ト曰フ

十二支は十二月に属する。十二律は音楽上の十二の調子で、一に十二調子とも云ふ。自然の声音を宮・商・角・徴・羽の五声に區別し、これを十二月及び十二支に配当して黄鐘(十一月・子)大呂(十二月・丑)大蕤(正月・寅)夾鐘(二月・卯)姑洗(三月・辰)仲呂(四月・巳)蕤賓(五月・午)林鐘(六月・未)夷則(七月・申)南呂(八月・酉)無射(九月・戌)應鐘(十月・亥)と云ふ。

十二律

十二辰

辰は日月が二十八宿(星座)と合する所を云ひ、その位は恰度十二支の躰む所であるから故に十二支を一名十二辰とも云ふ。

△其辰ニ属スル者有リ。乃チ中ニ位シテ臨ム所、二十八宿ノ星ト禽トラ主ル。

十二禽

「其辰ニ属スル者」とは、十二支に属する十二禽を指す。それは次の如くである。
(禽)辰
鼠は子に属し、牛は丑に属し、虎は寅に属し、兔は卯に属し、龍は辰に属し、蛇は巳に属し、馬は午に属し、羊は未に属し、猴は申に属し、雞は酉に属し、尤は戌に属し、豕は亥に属す。

この十二禽も、十二支と俱に天地の中に位して、下から上十二支を臨む所のものである。何を以て十二禽は十二支に臨むかと云ふに、十二支は素より二十八宿の七曜星と三十六禽とを主り、そして彼の十二禽は三十六禽の中にあるからである。三十六禽の宿と俱に十二支が主るときは、十二禽は自ら十二支に臨む所の者であることは明かである。

二十八宿

二十八宿は星宿を二十八に區分しての林で、東方は角・亢・氐・房・心・尾・箕、北方は斗・牛・女・虚・危・室・壁、西方は奎・寧・胃・昂・畢・觜・參、南方は

七曜星

井・鬼・柳・星・張・翼・軫の宿を云ふ。

七曜星は五星と日月とである。乃ち歳星（木曜星）^{ツカカ}熒惑星（火曜星）鎮星（土曜星）太白星（金曜星）辰星（水曜星）太陽星（日曜星）太陰星（月曜星）かこれてある。七曜星に雜曜星・計都星を加へて九曜星と云ふ。

三十六禽

三十六禽は蟻・燕・水牛・黄牛・兕牛・鼠・虎・豹・狸・兔・狐・貉・貉・蛟・兕・蛇・蚓・蛤・蜃・馬・鹿・獐・羊・犴・羚・猿・猴・玃・雞・雉・鳥・狗・狼・豺・豚・蓄猪を云ふ。

七曜星の誤り

△故ニ當ニ其生（星）ト宿ノ禽ト同ジカルベキニ、屬スル所ヲ為スガ故ナリ。

故にその七曜星と二十八宿の主る三十六禽と、彼の十二支とは、その位も同じくなければならぬ。何と云はれば七曜星と二十八宿と三十六禽と十二支も互に連属して居るからである。

△而シテ星ト禽ト又正副有リ。

十二支に属する所の七曜星と三十六禽とに於て、又正副の區別がある。正とは主となつてその事を行ふものである。副とは主の副となつて行ふものである。

△尾・火・虎・箕・水・豹ノ如キ皆寅・在リ。亢・金・龍・角・木・蛟ハ皆辰・在リ。虎・龍ヲ正ト爲ス。餘ハ皆此例ナリ。

本項は正副の例である。尾宿・火星・虎禽と箕宿・水星・豹禽とは何れも東と北との間の寅の方位にありけれども、前者を正とし後者を副とする。それで前例は虎を、後例は龍を正としたのである。辰には龍と蛟との二禽が属するが蛟は龍に似て龍で無いから、龍を正とし、蛟を副とする。又寅には虎と豹との二禽が属するが、豹は虎に似て虎で無いから虎を正とし豹を副とする。餘は此の例に従ふ。

△火虎・金龍ハ七曜ヲ以テ之ヲ紀ブ。

火虎・金龍は前に述べた通り、星と禽との正である。火と金とは十二支の五行では無く、十二支に連属する七曜星の名である。虎（寅）龍（辰）は十二支に属する所の七曜星（虎は火曜星、龍は金曜星）を以て紀ると云ふのである。

密日

△今ノ所謂密日ハ乃チ七曜ノ名號、太陽ノ直日ヲ以テス。則チ日ノ密、是レ日ノ宮ニ隨ヒテ言フナリ。

密日とは日の秘密にして、伏ふべからざる大凶日とされてゐる。これは七曜星の

納音とは、六十甲子（十干と十二支組合せの一組、六十より成る）へ各々五行の五音を容納するの意である。この法は何れの時代に何人が定めたものか不明であるが、内経に記載が無いことか推せば、恐らく内経以後にできたものであらう。十干にも十二支にもそれ〴〵五行の相生相剋があるによつて、これを組合せたる六十甲子に於て相生相剋を論ずると、甚だ複雑なものになり実用上不便であるから、その單純化を図る爲めに納音の法が考案されたものであらう。今の民間曆に各生年の九星・干支・納音等が書いてあり、干支の五行によらず、二年づつ、（例へば甲子と乙丑）を比較に柘榴木・大海水等々と書いてあり、俗間ではこれによつて水性の女とか火性の男とか云つてその人の性格や運命を判断したり、或は相生相剋の理を應用して縁談の合性を見たりなどする。これが納音の應用である。

この圖は六十甲子を花形（環状）に排列して作るから、六十花甲の圖とも云はれてゐる。納音は曆家に所謂八專日・十方暮・天一天上等を割出すに必要なるものであるが、医道には關係が無く、素問・靈樞にも書いて無いことであるけれども、本書でこれまでに論じた五行・十干・十二支に次いで陰陽学としては納音を研究すべき順序であるから、それでこの圖を掲げて納音を論ずるものであらう。そして納音の法は先づ五行の生数・干支の数・大衍の数を定め、各々其の數に従つて五音を

五行の生数 水一 火二 木三 金四 土五

干支の數 甲・己・子・午各九 乙・庚・丑・未各八 丙・辛・寅・申各六

丁・壬・卯・酉各六 戊・癸・辰・戌各五 巳・亥各四

六衍の數 四十九（五十を引くとも、一は九極に引く）

これから納音の割出し方を述べる。初学者は右の圖を参照せられたい。先づその干支の數（圖中同行に属するもの全部の合計）を立て、これを太衍の數四十九の中から除いて、残る所の太衍の數から五行に従つて五つづつ何回でも引き去り残りを五以下とし、その残つた數と同じ生数の五行を求め、それが相生する五行を取る、乃ちその五音を納れるのである。例へば圖中甲子・乙丑の上は金音を納れる者は、甲子は各々その數九で十八、乙丑は各々八で十六、十八と十六と合せて三十四である。この三十四を太衍の數四十九の中から引くときは十五残る。その十五から五行の五數に従つて五つづつ二回除けば五つ残る。五は土行の生數である。故に土生金として甲子・乙丑、金音を納れるのである。餘は總てこの例による。其他に納音の割出し方の別法や十方暮・八專・六一元上等の說があらけれども医家に必要なことと無いから畧す。たゞ腰眼の灸日に就ては納音に觸れた問題であるからこゝに附記する。この說は内経よりは遙か後世に出たものであらう。癸亥の灸と云

つて、勝眼（俗称亥の目）の宛に、十月癸亥の日に灸することかあるが、この日を撰んだのは納音の法に倣つてゐる。癸と亥も干支は皆水である。納音に於ても癸亥は水音を容れるものである。然るときは癸亥は十干・十二支・納音の三つが水行である（三つが同行なるものは六十甲子中これのみである）。それに又十月（亥）は純陰で水が生ずる時である。而して勝眼の宛は眞水補益の灸処であるから、特にこの日を撰んで天然と人為の両方面から奏効を圖つたものであらう。

論納音 第四

十干十二支相承共成六十日。乃天地之紀。符會以統日焉。甲東方春始生爲時之長。子北方陽始生爲氣之先。則甲子爲首。而乙丑次之。然辰之中交相參同。則五行互以臨遇。無一專致其親矣。又有納音之法。乃旋相爲宮之法也。正與律呂之用同。而一辰之中又含五音。十二辰共納六十音也。如子之一辰。甲子金。丙子水。戊子火。庚子土。壬子木是也。按漢志。同類專隔八生子者。此納音法也。同類專專隔甲陽之干。子陽之辰。上下相臨。皆陽則亢而無以非其和。故娶乙丑爲妻。乙丑干辰皆陰也。餘位並同。隔八生子。謂甲子前八位下生壬申金。又隔八生庚辰金。三位然後左行向火。至火依前隔八生水。火三下生而後至木。木三下生而後至水。水三下生而後至土。土三下生而後至金。

乃爲一周。復自甲午上生金。依次而轉。然隔八生子。則除上下兩位而言也。隔八非第八也。若自甲子至癸酉。通數之乃共十矣。此周甲之氣耳。納音之所以金先者。則五行之中唯有金聲。鑄而爲器則聲彰矣。白虎通曰。鐘兌音也。感之人則成肺。亦爲五藏先。以主音聲。外應皮毛。堅而響亦由金之性也。至秋肅殺。万物堅燥而風勁悽鳴。乃金之性也。反于自東右行向火。五音始而左行向水。陰生於子所以下生。陰生於午所以上生。夫上下生者。正謂天氣下降地氣上升。易曰。天地交泰。義見於此。然所生止三者亦三元之義。故經曰。三而成天。三而成地。三而成人。易爻之象取三。老子曰。一生二。二生三。三生万物。即其意也。蓋有始有中。有終畢矣。五音變而周。乃十二辰各含五音。則成三十位。而遍六十甲子也。故經曰。陰陽相錯變由生也。又曰。高下相召。升降相因而變作矣。此之謂也。十干十二支相承ヲ共ニ六十日ヲ成ス。乃々天地ノ紀、符會レテ以テ日ヲ統ブ。甲ハ東方、春始生レ時ノ長トス。子ハ北方、陽始メテ生ジ氣ノ先トス。則チ甲子ヲ首ト爲シテ、乙丑之ニ至ル。然レトモ辰ノ中ニ交相參同スルトキハ、五行互ニ以テ臨遇シテ一專スルコト無クシテ、其類專ニ以テ一宮ノ法ヲ相爲ス。正ニ律呂ノ用ト同じ。而シテ一辰ノ中ニ五音ヲ含ミ、十二辰共ニ六十音ヲ納ル。子ノ一辰ノ如キ、甲子ハ金、丙子ハ水、戊子ハ火、庚

子ハ土、壬子ハ木是ナリ。漢志ヲ按ズルニ、同類妻ヲ娶リ、ハヲ隔テ、子ヲ生ズルト云フ者ハ此レ納音ノ法ナリ。同類妻ヲ娶ルトハ、謂ユル甲ハ陽ノ干、子ハ陽ノ辰、上下相臨ミテ皆陽ナルトキハ九リテ以テ其和ヲ兆スコト無シ。故ニ乙丑ヲ娶リテ妻ト爲ス。乙丑ハ干辰皆陰ナリ、餘位地ニ同じレハヲ隔テ、子ヲ生ズルハ、謂ユル甲子ノ前ハ八位下、壬申ノ金ヲ生ジテ、又ハヲ隔テ、庚辰ノ金ヲ生ズ。三位ニシテ然シテ後ニ左行シテ火ニ向フ。火ニ至リテ前ニ依テハヲ隔テ、火ヲ生ズ。火ニツ下生シテ後ニ木ニ至ル。木ニツ下生シテ後ニ水ニ至ル。水ニツ下生シテ後土ニ至ル。是レ一ノナマシテ復金ニ至ル。乃テ一周ト爲ス。復タ甲午ヨリ金ヲ上生シ、次ニ依テ転ス。然シテハヲ隔テ、子ヲ生ズルトハ、則チ上下ノ兩位ヲ除イテ言フナリ。ハヲ隔ツトハ第八ニ非ズ。甲子ヨリ癸酉ニ至ルカ若キ、通シテ之ヲ數フルニ乃チ共ニ十ナリ。此レ申ノ氣ヲ周ルノミ。納音ノ金ヲ先トスル所以ノ者ハ則チ五行ノ中、唯金ノミ聲有リ。錯テ器ト爲ストキハ音聲彰ハル。白虎通ニ曰ク、鐘ハ兌ノ音ナリ、之ヲ人ヲ感ズルトキハ肺ト成ル。亦五藏ノ先ト爲リ以テ音聲ヲ主リ、外皮モニ應ズ。堅クレテ響有ルモ亦金ノ化ニ由ル。秋ニ至リテ万物ヲ肅殺シ、堅燥ニシテ風勁ク傳鳴ス。乃チ金ノ性ナリ。反(支)干ハ束ヨリ右行シテ火ニ向ヒ、五音ハ西ニ始マリテ左行シテ南ニ向フ。陽ハ子ヨリ生ズ、下ニ生ズル所以、陰ハ午ヨリ生ズ、上ニ生ズルノ所以ナリ。夫レ上下

一主ナル者ハ、正ニ謂ユル天氣ハ下降シ地氣ハ上升スルナリ。易ニ曰ク、天地交ルハ泰ナリノ義、二ニ見ハル。然レトモ生ズル所ニ止マル者ハ亦三元ノ義ナリ。故ニ終ニ曰ク、三ニシテ天ヲ成シ、三ニシテ地ヲ成シ、三ニシテ人ヲ成ス。易又ノ象ニテ取ル。老子ニ曰ク、一ニテ生ジ、二ニテ生ジ、三ニテ生ジ、四ニテ物ヲ生ズトハ即チ其意ナリ。蓋シ始有リ中有リ終有リテ畢ンヌ。五音變ツテ四ル。乃チ十二辰ニ五音ヲ含ムトキハ、三十位ヲ成シテ六十甲子ニ遍シ。故ニ終ニ曰ク、陰陽相錯リ、變由テ生ス。曰ク、高下相召キ、針際相因テ變作ルトハ此ノ謂ナリ。

納音を論ず。納音は六十甲子へ各々五音を納れることである。上の表は陰陽五行の音を分けて、大呂六律、十二律の管を作った。納音の法も亦六十律に十二律に當つて定められたものである。

十干・十二支相承テ共ニ六十日ヲ成ス。乃チ天地ノ紀ニ符會シテ以テ曰ク、納音甲子六十日は天地陰陽五行の一周紀である。干支の兩者が符會會同して毎日一辰ニ當つて六十日を統べ主るものである。

△ 甲ハ東方春始メテ生ジ、時、長ト爲ヌ。子ハ北方、陽始メテ生ジ氣、先トス。則チ甲子ヲ首ト爲シテ、乙丑之ニ次グ。

甲は東方の木位にして、春氣が始めて發生する處である。故に甲の主る所を以て時の先長とする。子は北方の水位にして、一陽の始めて生ずる處である。故に子の位する所を以て氣化の先長とする。故に甲子を干支配合の首として乙丑・丙寅と次第に転行するのである。

一專

△然レドモ辰ノ中ニ交會者同スルトキハ、五行互ニ以テ臨遇シテ一專スルコト無クシテ其統ヲ致ス。

然れども十二支の一支毎に十干の氣が互に交り合ふときは、干支の五行の氣が互に彼に臨み此に遇ふによつて、陰陽五行の氣が一つも獨立して専ら主ることなく、斯くて干支が相合して六十甲子の一統を至すものである。干支には一專することか無いが、次に述べる納音は一專するものである。

納音

△又納音ノ法有リ・乃チ旋リテ宮ノ法ヲ相爲ス。
六十甲子に於て又納音の法がある。乃ち干支が相合して旋つて音を出し、宮(土)商(金)角(木)徵(火)羽(水)の五音の法を相爲すのである。宮は中央の黄鐘に屬して、五音十二律がこれより分れるから、五音の法を統て宮の法と云ふのである。

六律六呂

△正ニ律呂ノ用ト同ジ。
十二律の中に於て陰陽の管に分ち、陽の管(子寅辰午申戌)を律(六律)と云ひ、陰の管(丑卯巳未酉亥)を呂(六呂)と云ふ。六十甲子納音の法も亦彼の十二管の陽律陰呂の用と同じい。

△而シテ一辰ノ中、又五音ヲ含ミ、十二辰共ニ六十音ヲ納ル。
納音は十二辰の一辰の中へ、各々五音づゝを含み容れるものである。それで六十甲子の數に合する。

△子ノ一辰ノ如キ、甲子ハ金、丙子ハ水、戊子ハ火、庚子ハ土、壬子ハ木是ナリ。
これはその一例である。餘辰も皆此の如くである。それは納音の圖によつて索つて明かである。乃ち干支の頭に該る五行が納音である。但し干支の頭の真中に線のあるものは線を通してその上の五行を見る。

同類專

△漢志ヲ按ズルニ、同類專ヲ聚リ、ハヲ隔テ、子ヲ生ズト云フ者ハ此レ納音ノ法ヲ

漢志とは前漢書の律呂志である。劉温舒が漢志を讀んで考察するに、その書に「同類妻ヲ娶リ、八ヲ隔テ、子ヲ生ズ」とあるのは、今の納音の法であると云ふのである。併しこれは十二律の管の法であつて、納音の法とは聊か異なる。納音の法に同類妻ヲ娶リ八ヲ隔テ、子を生ずと云ふことは有る。同類妻ヲ娶るとは、甲乙は乙丑ヲ娶リ、丙寅は丁卯ヲ娶るの類である。八ヲ隔テ、子を生ずとは、中間の八位を隔て、それと同じい音(子)を生ずるのである。例へば(納音之圖参照)甲子・乙丑は金音である。甲子の一位を除いて、乙丑より丙寅・丁卯・戊辰・己巳・庚午・壬申までの八位を隔て、癸酉に至つて復た金音を發する。餘はこの例による。そして同音(例へば金)を三つ生じて次は他音(火)に移る。その順序は金・火・木・水・土である。

漢志に謂ふ同類妻ヲ娶る云々の説は次の如くである。十二律の陽律は陰呂ヲ娶リ陰呂は陽律ヲ娶る、此れが同類妻である。次に八ヲ隔テ、子を生ずるとは、陽律より陰呂を隔て、陰呂より陽律を生ず。もとの八番目の位を生ずる。十二律の位

順は、前篇でも述べた通り黄鐘(律)大呂(呂)大蕤(律)夾鐘(呂)姑洗(律)仲呂(呂)蕤賓(律)林鐘(呂)夷則(律)南呂(呂)無射(律)應鐘(律)・十二支に應ずる。例へば陽律の黄鐘から陰呂の林鐘を生ずるには、大呂・大蕤・大夷・大南・大無・大應の六位を跳り起えて第八番目の林鐘を生ずる。こゝに「同類妻」と云ふ。他の律呂の所生もこの例に従ふ。十二律の法は大を跳り越えて八番目を生ずる。然るに納音の法は八を跳り越えて十番目に生ずるから、兩者同日に論へべきで無い。たゞよく似て居ると云ふまでである。

△ 同類妻ヲ娶ルトハ、謂ニル甲ハ陽ノ干、子ハ陽ノ辰、上下相臨ミテ皆陽ナルトモハ、尤リテ其和ヲ兆スコト無シ。故ニ乙丑ヲ娶リテ妻ト爲ス。乙丑ハ干辰皆陰ナリ。餘位並ニ同じ。

陽なる干支は陰なる干支を娶つて陰陽が和するのである。納音の箇中、上に書いてある干支は夫で、下は妻である。

△ 甲子ノ前ハ八位下、壬申ノ金ヲ生ジテ、又八ヲ隔テ、庚辰ノ金ヲ生ズ。既に説明した通りである。甲子の前へとは、甲子から乙丑・丙寅と前進して八位

下生

を跳り越えるのである。

△三位ニシテ然レテ後ニ左行シテ火ニ向ク。火ニ至リテ前ニ依テ八ヲ隔テ、火ヲ生ズ。火ニツ下生シテ後ニ木ニ至ル。木ニツ下生シテ後水ニ至ル。水ニツ下生シテ後ニ土ニ至ル。土ニツ下生シテ後ニ金ニ至ル。乃チ一周ヲ爲ス。

これと既に説明した通り金・火・木・水・土の順次に行く。尋常の五行の道は右行し、順次であるが、納音の道は左行して逆である。蓋し物の音を発するは逆である。此賦が故であるから、納音は逆に逆に行き、下生とは甲子より癸巳までである。甲午より癸亥までは上生である。

△復タ甲午ヨリ金ヲ上生シ、次ニ依テ乾ズ。

甲午の位より金ヲ上行する。これも下生と同じ順次である。(納音之圖の内輪の五行を見よ)

△然レテ八ヲ隔テ、子ヲ生ズルトハ則チ上下ノ兩位ヲ除キテ言フナリ。八ヲ隔テ、トハ第八ニ非ズ、甲子ヨリ癸酉ニ至ルガ若ク、通ジテ之ヲ數フルニ乃チ共ニ十ナリ。比レ甲ノ氣ヲ周ルノミ。

八を隔つとは、中間の八位を隔てることで、前後を合すれば十位となる。こ
甲(十干)の氣が十を以て一周するが故である。故に五音が次第に甲を周行して、
十位にしてその音を転ずるに由るのである。

△納音ノ金ヲ先トスル所以ノ者ハ、則チ五行ノ中唯金声アリ。鑄テ器ト爲ストキハ
音聲彰ハル。

納音の下生・上生の始に金を以て先とするのは、五行の中に於て唯金のみが声を
発するに由るのである。鑄て器とすれば音聲が彰かになる。鑄るのは火の力による。
それで納音では金の次に火を置くのである。

△白虎通ニ曰ク、鐘ハ兌ノ音ナリ。之ヲ人ニ感ズルトキハ肺ト成ル。亦五藏ノ先ト
爲リ、以テ音声ヲ主リ外皮毛ニ應ズ。堅クシテ響アルモ亦金ノ化ニ由ル。

白虎通とは後漢の諸儒の作で、白虎通(禮論)とも云ふ。その一節が茲に掲げてある。
鐘は金高の律器(樂器)で、兌の音を發する。兌は四方金の音である。この兌金の氣
を人身に感ずれば肺となる。肺は五藏の先長となつて人の五音五声を主り、外に於
ては皮毛に應ずる。皮毛が堅くして響かあるのも肺金の化による爲である。五藏の

先長とするのは、肺が諸藏の最上位に在るからである。

△秋ニ至リテ肅殺シ、万物堅燥ニシテ風勁ク搏鳴ス。乃チ金ノ性ナリ。

秋は金に属する。この時に寒肅殺厲の氣が行はれ、万物が堅く燥いて、冷風が勁く搏しく吹き鳴らす。これは金の性である。然るときは學器に於ても又人の藏及び四時に於ても皆金行に属する者は音聲があつて、金を聲音の長となすことが肯かれ

△反(支)ニハ東ヨリ右行シテ火ニ向フ。五音ハ西ニ始リテ左行シテ南ニ向フ。

十二支十干の常道は、東方より右行して南方の火位に向ふものである。然るにこの納音の五音は、西方の金位に始まり、左行して南方の火位に向ふものである。而して干支の右行と五音の左行とがすりちがふて音聲を發するの義に取らるのである。且つ西金より南火に向ふ者は、金は火を得てよく音聲を發するが故である。

△陽ハ子ヨリ生ズ、下ニ生ズル所以、陰ハ午ヨリ生ズ、上ニ生ズル所以ナリ。

既に述べた上生・下生の詳義である。納音の甲子より癸巳まで上三十位と下生と云ひ、甲午より癸亥まで下三十位と上生と云ふ。子は一陽始めて生ずるの位、午は

一陰が始めて生ずるの位である。南北を以て上下を分けるときは、北方の子は下の分、南方の午は上の分である。陽は子より生じて升るときは、下に生ずると云ふべく、陰は午より生じて降るときは、上に生ずると云ふべきである。

△夫レ上下ニ生ズル者ハ、正ニ謂ユル天氣ハ下降シ、地氣ハ上升スルナリ。易ニ曰ク、天地交ハルハ泰ナリノ義、此ニ見ハル。

陽は上生、陰は下生すべきが穩当なものであるのに、反つて陽に下生、陰に上生と云ひ、陰陽上下に反いて生ずるは何ぞやと云ふに、天氣は下降して下に生じ、地氣は上升して上に生ずるの理があるは、易の地天泰の卦象の辞に、「天氣は地に交はり、地氣は天に交はりて、天地交はるは泰とす」とあるのに一致し、泰なれば万物が造化の用を致すのである。納音の下生・上生はこの易理によるものである。

納音に下生・上生と云ふのは十二律の管の法を採つたものである。陰陽律呂の例へば黃鐘九寸より林鐘六寸を切るときは、その教を三分して一分を減じて生ずる。一分を減ずれば六寸である。故に林鐘(陰呂)六寸を生ずる。これを下生と云

納音の下生
上生の法

十二支の一支毎に各々五音づゝを含む。例へば甲子は金、丙子は水、戊子は火、庚子は土、壬子は木音とするが如きである。此の如く一支に五音づゝを含むときは、合する所の干支が二合づゝある。それは甲子と乙丑と合して何れも金、甲申と乙酉と合して何れも水の如きである。故に五音は三十位を爲し、それが支干はそり一倍六十甲子の位に遍満するのである。

△故に經ニ曰ク、陰陽相錯り、交由ラ生ズト。

經は天元紀大論である。陰陽の氣が相錯り合ふて、これによつて萬物の変化が生ずる。

△又曰ク、高下相召キ、升降相因テ変作ルトハ、此レ之ノ謂ナリ。

これは天元紀大論と六微旨大論に出てゐる。天の高きは地の下きを召き、地の下きは天の高きを召き、升るは降るに因り、降るは升るに由り、高下相互に召き合ひ、高下升降の交通に従つて万物の变化作るとあるのは、納音等の義が、支干陰陽相因て五音ま変化生ずる者は、内經に陰陽相錯交由生云々と云ふの義では無いが、納音のことは内經に書いて無いと雖も、經旨に一致するものである。

雜 録

第二輯

○直感的醫學

高橋 大和

現代の西洋医学は推理によつて構成されたものである。東洋固有の漢方医学は直感によつて構成されたものである。兩者間に於て基旨を異にしてゐるから、その体系に相違があるのは當然である。それだから西洋医学の頭を以て「内經」を皮相的に検討し、これを以て非科學的なりとして排斥するのは見当違ひである。漢方を觀るには、やはり直感を基調とせねばならぬ。内經研究の道程にある我等は、推理的な小問題に拘泥することなく、先哲が到達した程度までの直感力の涵養に心かくべきである。内經の一章一句皆先哲が直感の記録である。我等はこれに親しむことによつて自然と直感力を感應するるのである。運氣論など素人考へでは、陰陽をほとんど懸け離れて居るやうであるが、これを学ぶことによつて直感力を賦活せられ、知らず知らずの間に於て診察の秘義を會得し、それが日々手を下す患者の上に彰れて来るのである。明治の大思想家高山樗牛曰く「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と。是は現代と絶世よと云ふのではない。現代生活に即しなから現代を超越するのである。余は云ふ「吾人は須らく推理を超越せざるべからず」と。而して高き直感の世界から推理の世界を照らすのである。

○東洋医学 漢法病理 素問之豫備智識を讀む

高橋 大和

故トクトル渡辺瀧先生著「素問之豫備知識」上巻を讀む。先生は明治廿二年帝國医科大學を出て、十年の後歐洲へ留学せられたのであるが、西洋医学は臨床上不満な處あることを心付かれ、帰朝後は東洋医学に転向され、温古知新の新生面を開かんことを志して三十有餘年の春秋を

の研究に盡され、東洋には獨自の天文病理学あることを宣揚するを畢生の事業として本書を著されたのである。先生は、この古き東洋獨自の医学を現代科学の精神の下に体系づけ、東洋医学病理を認識し、文献を蒐集すると共に、現代的真理よりの批判を加へて普及せんとの念願の下に本書を刊行したと云つて居られる。上巻は昭和九年七十歳の時の著述であるが、中巻下巻を世に出さずして逝去されたことは遺憾である。先生も余と同じやうに『素問』の豫備知識として『素問入式運氣論奥』や『素問玄機原病式』によるべきことを力説して居られる。運氣論の一部の圖解を試みてあるが、説明が不充分で、且つ運氣論に精通せる程度に疑はしい点の認められるのは遺憾である。余はつう／＼考へて見るに、先生が未成品として遺し置かれた上巻、そして未だ世に出されざる中下巻の続行を繼承して完璧を期するものは我が『医経研究』の使命であることと自覚した。余は先生の如き医学大家の軌跡を解くには足りないものであるけれども、直感の医学を推理によつて闡明せんとするが如き不自然なやめて、どこまでも直感を基調とし、これによつて先哲の心の琴線に觸れこ見やうと思ふ。これならは学者で無くとも出来る仕事であり、又学者で無い人に発表してもよく理解されるであらう。

○暖風に弱い『宇宙線』

世界に廻り氣象との関係証明 仁科博士らに凱歌
昭和十五年二月二十五日の
大阪毎日新聞より

世紀の謎として世界の科学界に登場した『宇宙線』——遙から宇宙の彼方から日夜絶えず雨の如く地球に降りそそぎあらゆる物体を突きぬけて数百哩の地中まで達する正体不明の大放射線はさらに地球上層の成層圏や磁氣圏などにも重大な関係があることが判明、世界の科学の眼はこの一点に注がれ世界各国科学者の、名譽をかけた研究競争が開始された矢先『宇宙線』は氣象と関係があるか？との命題に答へるためわが斯界の第一人者理研の仁科芳雄博士、関戸

島村両学士、中央氣象台荒川秀信技師らの血みどろな共同研究によつてはじめてその謎が解かれ廿三日午後中央氣象台で開かれた大日本氣象学会の席上報告された。

この測定は昭和十年から始められ最近二つの議論が張られたが、その一つは宇宙線の強度は氣圏により影響されること、たとへば風がシベリヤ大陸、太平洋、揚子江のいづれかに吹くかにより宇宙線の強弱が生ずること、他の一つは低氣壓の周囲では宇宙線強度が特殊の分布をすること、つまり宇宙線は暖風が吹くと弱くなり冷風が吹くと強くなるという新発見である。この貴重な研究により宇宙線の観測が氣象観測に欠くことのない出来事の一要素であることはじめて證明されたのである。

仁科博士談 宇宙線と氣象との間になにか関係がありさうだといふことは早くからいはず、各国でもその研究を初めてまゝりますが未だ何等発見があつたことも聞いてまゝりません、今度の研究で氣象と関係あることがやうやくハッキリしました、この研究を發達させて行けば地上で宇宙線の量を正確にはかることによつて最近問題になつてゐる成層圏の高さを計つたり低氣壓などを知るのに利用方面が開けるでせう(東京発)

(大和曰) 氣象は疾病と関係がある。宇宙線と氣象と関係があるとすれば、宇宙線と疾病と関係があるわけである。先哲が无に五運有り疾病を主ると直感したことか、数千年後に推理によつて漸く闡明の曙光を見出されるに至つたのである。

○始まった三生の觀艦式

昭和十五年二月二十八日の
大阪毎日新聞より

この大空の奇觀は既報の如く水星、木星、金星、土星、火星の五遊星がクウをの星座を中心に西の夜空に殆ど斜一直線に連る天界未曾有の大景観と、二月中旬ごろから木、金、土、火の四遊星は大体一直線に見えてゐたが、去る廿四日ごろ太陽系の遊星のうちで、もつとも太陽

これは荒唐無稽なものである。

○編後雑俎

⑤ 医経研究第一輯二丁目次の最終に論五行勝復とあるのを五行勝復論に訂正を乞ふ。その理由は後でわかることである。

○ 医経研究は発表以来すばらしい人氣で続々とお申込があり満員が近づいて参りました。この調子ならば満員後も相当御申込があること、存じます。再版発行は絶対に致しませぬから、満員後お申込の方に満足な與へる方法として、舊読者の不要本を買戻して配給すること、致しました。第一輯だけをやる方も少々有る様ですが、一冊七十銭で買戻して頂きますから詳細は御囑言下さい。次に一冊づつ御申込になる方は、今後お引つゞき御購読の御意志でしたら其旨ハガキでお知らせ下さい。さうしておれば双方に好都合です。

○ 医経學員の方には当所発行の書籍(特定のものを除く)を定價の一割引で提供致します。この場合注文書の貴名に医経學員と肩書して下さい。さうして無いものは割引致しません。

○ 皇紀二千六百年の紀元の佳節に『標準宛名軌範』を發行致しました。本書には高橋六和か多年の研究による宛名字義の解釋が十四経三百五十四宛漏れなく收載され日本鍼灸界初めの発表であります。各地盲学校、鍼灸教授、學生、臨床家、漢方研究所運鏡會員に好評を以て迎えられるて居ます。定價金貳圓送費十八銭、百部の限定出版ですから品切れとならぬうちに御注文下さい。

○ 医経研究第一輯に就て各地からお褒めのお手紙が参つて居ますが一々發表することは宥して頂き、茲に厚くお礼申上げると共に、今後高一層努力して各位の御期待に副はんとを期します。印刷技術も今後は次第によくなること、存じます。何卒引続き御愛顧下さい。(九和生)

401
248

版權
所有

昭和十五年三月十五日 印刷
昭和十五年三月二十日 發行

定價金壹圓

米子市東町九十二番地
著作發行 兼印刷者 高橋啓三郎

發行所 米子市東町九十二番地
高橋漢方研究所
振替岡山九八四〇番

終

